Rihoの
ドイツ便り
No.63

親子で環境教育「森のステーション」

見晴台の踊り場で、木について学習

「リスの赤ちゃんはどこに住んでいるの」「モグラは何を食べているの」…そんな子どもたちの質問に答えてくれるのが、ハノーファー市内北部にある「森のステーション Waldstation」だ。都市にある森として、パリのブローニュの森に次いで大きいアイレンリーデの森の一角に位置し、環境教育の場としてたくさん家族連れが訪れている。

3.7 ヘクタールの敷地には、池や動物小屋、遊歩道がある。鳥小屋では、病気や怪我をした鳥を飼い、完治したら自然に返す。さまざまな鳥の巣の見本があり、穴の大きさや鳥の種類などのほか費用についても書いてあるので、自宅に取り付ける際に便利だ。遊歩道に沿ってさまざまな木に解説がついていて、特徴がよくわかる。コウモリや、アリの巣も観察でき、リサイクルやコンポストについても学べる。

特筆すべきは、高さ 32 メートルの見晴台。木々がすべて眼下に見え、市役所や協会、駅、サッカースタジアムなど市内中が見渡せる。2009 年にできたばかりの木の建物で、途中で針葉樹、鳥の卵、リスなどテーマごとに学習できるよう工夫がこらしてある。子どもたちは景色のよさ、木々の緑の濃さに驚き、歓声をあげて喜んでいる。たくさんの人が上ってくると少しぐらぐら揺れるのも魅力的。

ここでは、グループや学校のクラスに環境教育の授業も実施している。実際にイタチがネズミを噛み砕く様子を見たり、網をもって水中生物を捕獲するなどなど、体験授業が可能だ。目をつむって森の中を歩いたり、腐った木を調べたり、五感を大切にしている。室内では小枝や草など自然な素材で工作をしたり、手仕事もできる。

のんびり自然の中で深呼吸するだけでも安らぐというもの。春の気持ちのいい日差しの中、自然と触れ合うにはもってこいの場所。もともとドイツ人は森を散策するのが好きだけれど、小さいころからこのような場所に足を運んでいれば知識も深まり一石二鳥。入場料無料。見晴台 1 ユーロ。

田口理穂 ごみかんドイツ特派員

ドイツで子育て ♪

ドイツの新学期は 8 月に始まる。その年の 9 月末までに 6 歳になる子が、8 月に入学する。明は 10 月生まれなので本来なら再来年の夏、6 歳 10 ヶ月で小学校。しかし、ドイツでは早く入学させたり、まだ適していないと思えば 1 年遅らせることができる。9 月生まれの友達はみな来年入学するので、明も一応来年入学で申し込んだ。幼稚園や小学校の先生、医者の意見を参考にするが、最終的に来春決めるのは親。小学校での留年や飛び級も珍しくないので、早く入れて難しければ留年させればいいともいう。「少しでも長い子ども時代」がいいのか「小さいころから伸ばしてあげる」のがいいのか、なまじ選択肢があるだけに迷う。明は学校見学に行き、行く気満々だが…。ちなみに学校に行く前年の保育料は無料。すでに払っていても、入学が決まれば返却される。